



田中舘愛橘 (1856-1952)

Tanaka Kagekida-A. 

写真：文化勲章受章時(昭和19年4月29日) 題字：氏名サインとも田中舘愛橘自署より

田中舘愛橘会 会報58号

(たなかだてあいきつ) 岩手県二戸市出身の物理学者。日本の理科学諸学の基礎を築く。文化勲章。文化人切手。東大教授。貴族院議員。地球物理学の研究、度量衡法の確立、光学・電磁気学の単位の研究、航空学・気象学の普及などに功績。日本式ローマ字論者。

三人の田中舘教授

副会長 菅原孝平
(前二戸歴史民俗資料館長)

1 はじめに

郷土の先人で、世界的業績を上げた田中舘と聞けば、大方は「ああ、田中舘愛橘博士だ」と頷くだろう。それはそれで当然として、ほかに世界的業績を上げた田中舘教授が他に二人いたことは、地元でもほとんど知られていないといっているだろう。二人の教授とは、田中舘寅士郎と田中舘秀三である。

愛橘教授の業績や人柄については、専門的な著述から一般社会人向けのものまで多数出版されているし、また子ども向けのマンガ本『日本の物理学の父 田中舘愛橘』や小冊子『田中舘愛橘物語』で身近に知ることができる。しかしほかの二人の田中舘教授については、なかなか知る機会がないのが実情だ。

そこでこの稿では、愛橘教授については業績解説記事の紹介にとどめ、主として二人の田中舘教授を紹介する。

2 田中舘愛橘 (たなかだて あいきつ)

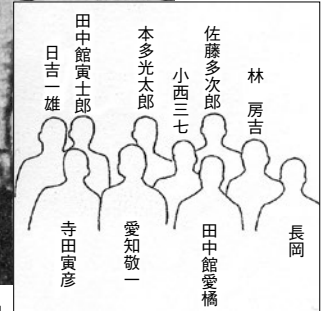
安政3年(1856)～昭和27年(1952)

入門編としてはマンガや、小冊子が好評だが、具体的業績は、かつて二戸市の「広報にのへ」に連載した。2014年8月1日号(No.207)から2016年3月1日号(No.245)まで毎月1日号に20回にわたった。タイトルは『今 やらねば』～田中舘愛橘の生涯～で、読みやすかつ理解しやすい内容になっている。当時本会事務局長だった中村誠氏と筆者が担当した。ネットで検索すれば、バックナンバーを読むことができる。ぜひおすすめしたい。

『長岡半太郎伝』に載っている貴重な写真がある。主任教授愛橘を中心とした明治36年(1903)6月の東大理論・実験物理学科卒業記念写真だ。長岡半太郎とは、東大物理を卒業した愛橘の弟子であり、かつ同僚教授であった。物理教室が実験物理と理論物理に分科する際、理論物理を担当し日本の近代物理学の発展に寄与した。



【明治36年(1903)6月の東大理論・実験物理学科卒業記念写真】
(『長岡半太郎伝』より)



写真のなかの三人が、のち文化勲章を受章した。しかも第一回受章者に長岡半太郎と本多光太郎が選ばれ、同時にやはり愛橘の弟子で水沢緯度観測所長、Z項発見の木村栄^{ひさし}が受章している。つまり第一回目の文化勲章を受章した科学者三名は世界の科学史に残る業績を上げているが、ともに愛橘の指導の下で育った物理学者だ。愛橘がわが国物理学草創期の大御所で、「日本の物理学の育ての親」と言われることが、納得できるであろう。愛橘は第四回目に受章している。

この写真には寺田寅彦の姿も見える。もし生存していたなら確実に受章した（であろうと、筆者は確信しているが）物理学者だ。警句「天災は忘れた頃にやってくる」で知られるあの有名な寺田寅彦だ。寺田の真後ろ、左から2番目が田中館寅士郎だ。

愛橘を中心に、世界物理学史に残る“綺羅星の科学者”たちが勢ぞろいしている珍しい写真だ。

3 田中館寅士郎 (たなかだて とらしろう)

明治11年(1878)～昭和3年(1928)

① 誕生から大学進学まで

田中館寅士郎は愛橘の異母末弟で、愛橘とは22歳離れている。父稲蔵^{とうぞう}は二度妻に死別し、三人目の妻キタとの子。明治11年(1878)8月23日、福岡の五日町で生まれた。この年、國分謙吉(民選岩手県知事第一号である農民知事)も生まれている。

明治25年(1892)福岡尋常高等小学校を卒業するが、明治19年9月の試験成績を発見した。病気欠席8名を含め学



【田中館寅士郎】

級23名中第5位の成績で、算数が40点で6位という結果だった。上京すると愛橘の世話になりながら私立日本中学校から、明治30年(1897)7月第一高等学校(一高)に進学し、さらに明治33年(1900)7月帝国大学理科大学(以下、東京帝大とか東大とする)物理学科に進学。教授は兄の愛橘(実験物理学)とその弟子長岡半太郎(理論物理学)だった。

寅士郎の同級に寺田寅彦がいる。「寅」は偶然でなく、共に明治11年寅年の生まれ。ちなみに父稲蔵は、愛橘の第二人に羊次郎、甲子郎と名付け、生まれ年の干支をあてたのである。



【田中館寅士郎家族】

② 虹の科学史に登場した初めての日本人科学者

明治36年(1903)6月の東京帝大理論・実験物理学科卒業写真に写る寅士郎は後列左から2番目の学生服姿だ。兄が主任教授で弟が学生という、かなり珍しい情景といえよう。同期に寺田寅彦、愛知敬一がいる。愛知は明治41年(1908)そして翌42年(1909)には寺田がヨーロッパに留学するが、寅士郎にはその機会是与えられなかった。留学中の寺田寅彦から寅士郎宛ての絵葉書が残っている。

大学院に進んだ寅士郎と愛知敬一が、教授長岡半太郎から与えられた共同研究テーマは「光のスペクトル分析・虹の研究」であった。二人は虹の光源である太陽を点光源としてきたそれまでの考えから、有限の大きさを持つ円光源として理論を構築した。その結果、実際の虹を説明するに足る結果が得られ、アリストテレス、デカルト、ニュートンと続く虹の研究史で、数学的理論は一つの完成を見たという。明治37年(1904)のことであるから、寅士郎26歳であった。この論文は今、英文で読むことができる。こうして寅士郎は「虹の科学史」に登場した初めての日本人科学者となったのである。

(417)

Proceedings
OF THE
Tōkyō Physico-Mathematical Society.
Vol. II. No. 27.
Nov. 1905
ON THE THEORY OF THE RAINBOW DUE TO
A CIRCULAR SOURCE OF LIGHT.
BY
K. AICHI AND T. TANAKADATE.
(Read October 21, 1905.)

1. Some time ago, we have communicated a paper to the society under the above title¹; this paper was criticized by Dr. Pernter², but as most of his reasonings seem to us inadmissible, it would not be superfluous to pass a few remarks on some of his criticisms.

According to Airy, the form of the wave front immediately after leaving the surface of the drop, in the plane containing the source of light s , the center of the drop c and the observer's eye o , is given by the equation $y=ax^3$, taking the axis of y in the ray of minimum deviation, and the coordinate origin A very near to the surface

藤岡由夫編著『高嶺俊夫と分光学』から引用する。

其頃東大の大学院で唯一人、分光学研究と云う題目で研究して居られたのが田中館愛橘先生の令弟田中館寅士郎（1903年理論物理卒で、大学院の研究題目は1903年以来“スペクトル分析”となっていた）という方であった〔中略〕……此寅士郎氏は兎角健康が優れられず分光学の方の業績は纏められずに終わった。

『長岡半太郎伝』は次のような解説を載せて、寅士郎を惜しんでいる。

「実は、1903年9月に大学院に進んだ田中館寅士郎は「スペクトル分析」をテーマにしており、長岡の研究を受けつぐかに見えたが、病身の彼はその方面で研究成果を出すに至らなかったのである。」

また西條敏美著『虹 その文化と科学』から引用する。

「論文は1904年「円光源による虹の理論」と題して英国の学術誌『フィロソフィカル・マガジン』に発表された。発表当時二人はまだ大学を出たばかりの名もない若手研究者であったが、今日に残る業績を残した。」

③ 東大物理学教室の教授・講師陣に

明治37年(1904)年度に寅士郎は、愛知敬一の後任として(一年足らずの間という)東大講師となった。この時期、兄の愛橘主任教授を中心とした東大物理学教授陣の構成は教授3人、助教授2人、講師4人だった。助教授に田丸卓郎(盛岡出身)がおり、講師に本多光太郎や寺田寅彦らに加え、弟の寅士郎が入った。東大物理学教室を岩手出身の物理学者三人が教授、助教授、講師として支えた時期があったのである。教室内で南部弁が交わされていたかもしれない。



【前列左から：田丸卓郎夫人、田中館愛橘、田丸母堂、田中館美穂】
【後列左から：田丸卓郎、田丸節郎、田中館寅士郎、田丸陸郎】

また愛橘は寅士郎にとって教授と学生の関係であると同時に、私的には遙か年長の兄、兄弟であるから、寅士郎は愛橘に対しては他の学生以上に気遣いをしたと思われるし、また雑用などをこなしていたようである。

④ 兄に次いで全国の重力測定へ

兄愛橘の地磁気・重力の研究の延長でもある測地学委員会の事業として、大学の暑中休暇を中心として寅士郎らは全国の重力測定に出張している。明治38年(1905)7月10日～9月5日には熊本・八代・久留米・長崎・和歌山・奈良・山田・土浦・水戸・平の重力測定を行った。また明治39年(1906)7月からは盛岡や福岡、八戸でも測定した。明治41年(1908)まで東北・関東・山陰・北陸など31か所の測定に参加した結果は明治43年(1910)の万国測地学協会総会報告(独文)に印刷された。

寅士郎はその後、明治38年(1905)東京物理学校講師(明治41年2月撮影の写真によれば、教師陣は校長と講師16名から成っていて教授という職名はない)、その後明治40年(1907)陸軍砲兵学校の陸軍教授、そして44年(1911)官立の鉱山専門学校として全国で唯一設立された秋田鉱山専門学校(元秋田大学鉱山学部)教授となり、学生の指導に当たった。大正8年(1919)9月依願退職し、慶応義塾大学予科の教授に迎えられた。



【秋田鉱山専門学校教授時代 前列右から6人目】

⑤ 寅士郎の死をパリで悼む愛橘

昭和3年(1928)7月31日、寅士郎は惜しまれながら50年の生涯を閉じた。この日、愛橘は国際連盟知的協力委員会への出席で、スイスのジュネーブに滞在していた。愛橘は8月5日パリに戻ったが、その日は日曜日で電報を受け取れず、翌月曜日になって大使館で受け取り、開いてみると“Torasiro dead”。弟寅士郎の死をパリで知ることとなった。

直ぐに「…たった一人、生き残った兄弟に死なれた…」と、家族にお悔やみを書いた。ローマ字書きである。「…写真も手紙も形見代(かたみしろ)がないから、朝取った電報を部屋の東側にピンで張り付けて、その前に、今買ってきた花を手向け、東の方の窓を開けて、上着だけ黒いモーニングを着て、柏手を打って拝んだ…」と認めている。神葬祭であるから柏手を打ったのである。

*Asa Taishikuron de suru mita
isadennie ni itta,
Hana wo Katte kite Torasiro
ni tamuketa.*

昭和3年(1928)8月6日. 月曜日

【愛橘のローマ字日記】

Hotel d'Jena, Paris.

Obasan hazime, Sin'itirô San ikano Goitidô ni Okuyami wo môsiagemasu.

Geneva wo mikka ni tatte, 5nt no Nitiyô ni Paris e kaerimasita. Sonâ
Hi no Hiru ni Taisikwan no Hito ni attara, Denpô ga santû kite iru to iu
koto desita ga, nanno Yô ka siranai ga, sono Hi wa Nitiyô de Zimusyo ga
simatte imasu. Getuyô no Asa ni natte itte mimasita. Mada daremo kite
imasen desita. Huransuzin no Kodutai ni, Ore ni Denpô ga kite iru sô da
ga wakaruka? tō to kikimasuto, sassoku Syokikwan no Tukue no ueni aru Denpô
wo totte kureta. Hiraite mitara, "Torasirô dead" to site aru kara: Hito
wa itu nandoki simu ka wakaran mono towa oboete iru mono no, tada hitori
ikinokotta Kyôdai ni sinareta sabisii kanasii Kanzi ni udumoreru hoka nakatta.

Sore wa, sarinagara zibun no koto. Ooyakeno Yôzi wo simasi, Yado ni
kaeta. Hirusugi ni wa Akademii ni au Hito ga atta kara, huruwanai Kibun wo
hikitatete, Takisi ni notte dekaketa. Kaeri ni, Torokadero no Yoko no
Hakaba no maeno Hanaya de siroi Kikunohana to Bara to katte kita, sôsite,
Syasin mo Tegami mo Katami-siro ga nai kara, Kesa totta Denpô wo Heya no
Higasigawa ni Pin de haritukete, sono maeni ima katte kita Hana wo tamuke,
Higasi no hôno Mado wo aketa, Uwagi dake Kuroi-Morning wo kite, Kasiwade wo
utte oganda. Sôsite kokoro no Naka de kô tonasta;

"Aa waga Titi no Ti wo wakete umareta Torasirô, imawa kono Yo wo satta ka.
Nandi ga waga Ie no tame, waga Titihaha no tameni ôkuno Kurô wo kasaneta koto
wa wasureru koto wa dekinai. Ookuno Kazoku wo atoni site sazokasi Wakare ga
turakattarô. Soretomo sono tekino Seisin-zyôtai wa dô de atta ka? Tomo-
yasurakana
are, imawa/Nemuri ni tuita de arô. Tamasii yo, Kuni no Mamori to nare, mada
Ie no Mamori tome nare! Kotoni Nandi ga Uminokora ga, yoki tadasiki Hito to
naru yôni mimamore!"

Atono Hitotati wa toriwake, Karada to Kibun wo taisetuni nasai.

Aikita

4 田中館秀三（たなかだて ひでぞう）

明治17年（1884）～昭和26年（1951）

①下斗米秀二郎の誕生と血筋

田中館秀三の旧姓は下斗米、名前を秀二郎（秀次郎）だった。父与八郎は田中館愛橘博士の叔父で、下斗米家の養子。秀三は明治17年（1884）6月11日、母たよとの間に三男として福岡横丁で生まれた。愛橘の曾祖母、つまり与八郎の祖母はみわで、幕末期に北海防備の高い志を抱きながらも、南部盛岡藩と津軽弘前藩との確執がもとで津軽公を襲撃した（南部騒動）ことで江戸中を沸かせ、明治大正昭和と講談や小説、映画で一世を風靡した相馬大作（下斗米秀之進）の血筋を引いている。

②京都の旧制三高から東京帝国大学そして卒業、講師・教授に

進学した盛岡中学校では、同級に作家・音楽評論家の野村胡堂、大将板垣征四郎、二級上に首相米内光政、一級上に文化勲章の金田一京助、田子一民、郷古潔そして一級下に石川啄木と、そうそうたる人物が並び、盛岡中学の黄金時代ともいわれる。金田一京助らと学級委員を務め、啄木の同人でもあった。2学年の席順は88名中12位、5学年では74名中5位の成績だった。そして明治35年（1902）9月京都の旧制三高に入学する。

三高から東京帝国大学理科大学（現東大理学部）地質学科に進み、明治41年（1908）首席で卒業し、恩賜の銀時計組となった。地質学科の天才との評！ 在学中に秀三と改名。卒業と同時に東北帝国大学農科大学



【三高時代の秀三】



【幼少の田中館美稲子らと秀三ら】

前列左から3人目が田中館美稲

後列左から3人目が秀三、4人目が田丸節郎

(現北海道大学農学部)に赴任し講師、翌年には水産学科教授、農科大学助教授となる。若干25歳である。旧制福岡中学で講演。この年樽前山が爆発し道内火山等の調査に着手。

③ 文部省海外留学生・ナポリ大学助手、講師

明治43年(1910)2月、地理学・海洋学研究で文部省海外留学生(3か年)としてイギリス・ドイツに(ドイツ・ベルリン大学。イギリスは不明)。後イタリア・ナポリ大学でベスビオ火山研究。3年経過後は無給留学生に。自力でイタリア・ギリシャに残留し研究を続けた。ナポリ大学助手・講師(29歳)。英語ドイツ語イタリア語で論文。フランス語オランダ語スペイン語も習得したという。大正4年(1915)11月帰朝。留学は期間5年10か月の長きにわたった。この間、オランダ・イタリア等の国際学会に出席しながら「日本の火山噴火記録」を発表し、昭和11年(1936)まで続いたといわれる。

大学卒業後の7年間は、論文はドイツ語、イタリア語のみだったと伝わる。

世界的ソプラノ歌手三浦環にイタリア語会話を教えたと、昭和12年(1937)に語っている(きやす ぜんいち氏談『Romazi no Nippon』第582号)。

ナポリ滞在中の秀三から愛橘博士に出した手紙は、秀三の気鋭の学者魂をよく表している。

…何処の国に参り候ても火山学者は火山学上の自説を主張し、自分の信ずる所を何処までも押し通し、勇氣は感心に御座候。これに比すれば、日本の如き火山国の火山学者の勇氣に乏しきは寒心の至りに候。(中略)帰国いたし候ても海洋学上の書物は札幌になし、火山学者上の書物もなし、全く独乙より日本へ探検旅行に行きたる感なきやと存じ居り候…

④ 帰国と結婚

文部省の派遣3年が過ぎても研究への情熱やみがたく、学費支給が打ち切られた3年半のイタリア、ギリシャでの生活は清貧そのものであり、ヨーロッパに出張してきた愛橘博士に会いに行くこともままならぬ秀三だった。大正4年(1915)12月帰国。翌5年(1916)秀三は愛橘の一人娘美穂と結婚、愛橘と婿養子縁組をし田中館姓となった。

札幌で始めた新婚生活は火山や地質調査・研究で国内外を精力的に飛び回る生活でもあった。



【田中館教授とご家族(令嬢美穂とお婿さんの秀三氏)】

⑥ 国際火山学会創立、日本人として初代副会長に

大正12年(1923)秀三は東北帝国大学法文学部講師となった。それから昭10年代にかけ日本学術研究会議の主任・部長など重要ポストに就き、国際地球物理学連合会総会で副会長になったほか、日本火山学会の発足。国際火山学会創立時には、日本人として初代副会長に推され、日本の火山研究が世界に認められることになった。また種々の国際学術会議での講演や調査、南米北米南洋出張やイタリア・オランダの学術会員に推されるなど、充実多忙な学者生活を送った。



【田中館秀三】

⑦ 戦火のなか“シンガポールの奇跡” ～天馬 空を行くがとき男～

●戦後50年特別企画●

“昭南島”を知っていますか
～戦火に映った人間像～

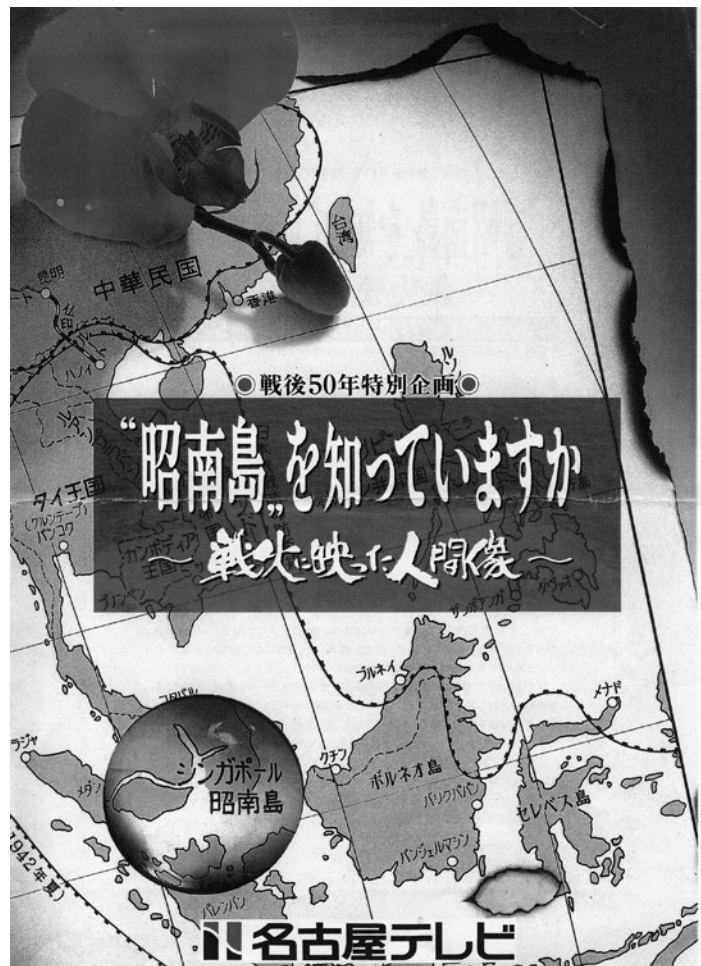
これは戦後50年を記念して、1995年7月23日にテレビ朝日系系列22局ネットで放映された、名古屋テレビ制作のドキュメント番組のキャッチコピーである。

また2012年6月7日、二戸歴史民俗資料館に6枚のFAXが入った。角川書店映画企画局海外企画部の岡田氏からであった。映画の企画書だった。仮題は次の通り。

シンガポール建国50周年 映画企画

シンガポール物語

THE SINGAPORE STORY



【パンフレット】

1942年、日本軍政下のシンガポール。

日本軍人の手から、華麗で尊い植物園を守り抜くため、命を賭けた日本人学者がいた。

知られざる感動の「実話」を基に、
日本・シンガポールの資金と制作力を結集させる、
国際共同制作映画プロジェクト。

上記の両企画とも、学者「田中館秀三」が主人公である。残念ながら映画の企画は実現に至らなかった。が、シンガポール建国50周年にふさわしいと考えられた壮大な企画であり、秀三の破格の業績を認めていることは、否定できない事実だ。

作品の概要を転記する。

南国の植物園を舞台に描かれる華麗な映像と、 観る者の心を揺さぶる戦時下の真実の友情

◆ストーリー

1942年2月一。東北帝国大学講師・田中館秀三^{たなかだてひでぞう}は、資源調査のため、日本軍占領直後のシンガポールを訪れる。同じころ、ラッフルズ植物園副園長のイギリス人学者コーナー(35)が、豊田・元総領事に、植物園の保護を懇請に来る。同植物園は、世界有数の植物学の拠点として名高く、重要な資料も数多い。豊田は、田中館にその調査に当たるように指示する。

田中館は、兵站基地として使われていたラッフルズ植物園の荒れ果てた惨状を目の当たりにし、復興に取り組む。軍部の妨害や暴挙から植物園を守り抜こうと田中館が復興に奔走する姿を見ながら、コーナーや現地スタッフは、実は田中館が美しい植物園と共に、命を賭けて守り抜こうとしているのは彼等自身の命であることを知り、大きく胸を打たれる。やがて彼らの間には民族を超えた友情と尊敬が生まれ、絶望の戦時下一筋の希望の輝きを放っていく…

◆作品のイメージ

シンドラーのリスト

アラビアのロレンス



【前列左から 徳川義親侯爵、田中館秀三、E・J・H・コーナー博士】

E・J・H・コーナーは、述べている。

英人学者らは学者として果たすべきを果たさず、われ先に本国へ帰還するか収容所入りをした。残された文化財と学問を混乱から守ったのは日本人科学者だった。

わたしの心を打ったのは……負けてもなお、これだけ立派で、永久に後世に受け継がれていく業績を残した彼らの偉大さであった。

敗残者は今や勝利者である適性人の心に、大いなる勝利の印を刻み付けた。負けてなお勝つということは、こういうことを言うのだ。私はその大きさに圧倒され、夜空の下でいつまでも立ちすくんでいた。国家も、政府も、そして民族も、繁栄しては衰退し、そして破局を迎える。だが、学問は決して滅びない。私はこのことをシンガポールで、日本人科学者との交流を通じて学んだのである。

田中館秀三教授がいなかったら、シンガポールの博物館と植物園と図書館は跡形もなく滅び去っていたであろう。若き世代に残すべきものを失い、自分たちの時代を子供たちに誇り高く語って聞かせることもできなかったであろう。たとえ一粒の種は小さくとも、一粒の塩は無に等しくとも、それは人類を救う大きな力になりうる。教授は傷つき、寂しく島を後にした。だが私たちは彼の遺志を受け継ぎ、希望の灯を高々と掲げ続けたのである。

「科学と学問に国境はない」を秀三は、事実として演出した。しかも適性人であるイギリス人科学者たちを巻き込んで。今考えても、破格の国際感覚だ。

この項について、『田中館秀三 業績と追憶』を中心に次の書籍を参照されたい。

1. E・J・H・コーナー著、石井美樹子訳『思い出の昭南博物館』
(中公新書 659) 絶版
2. 石井美樹子著『友情は戦火をこえて』(PHP こころのノンフィクション)
3. 戸川幸夫著『昭南島物語』上下 読売新聞社
3. 楽しく美しいまちづくり推進委員会『たがらっこ』 2002.3 第6号
5. 荒俣宏『奇っ怪紳士録』 平凡社
6. 相馬福太郎著『二戸の先人 二十人』
7. 二戸市教育委員会『小学生副読本 二戸市の先人たち』
8. NATURE, 157, 671, (1946)
9. NATURE, No 4250, April 14, 1951

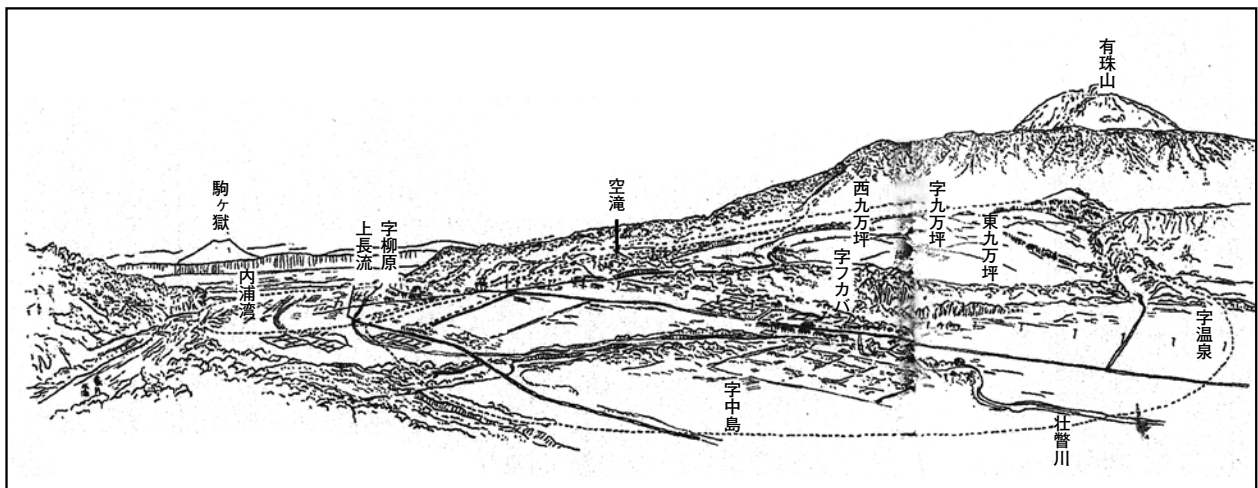
⑧ 昭和新山の名付け親

新しい火山・昭和新山。それは今から70年以上も前もことだが戦後、北海道といえば新しい火山「昭和新山」がとても有名だった。それは誕生が戦争中ということで、情報が洩れるのを極度に恐れた軍は、新しい火山誕生のニュースをきびしく伏せたから、国民には知らされなかったのである。人々が住むところに突然火山が誕生した。今ではだれも想像

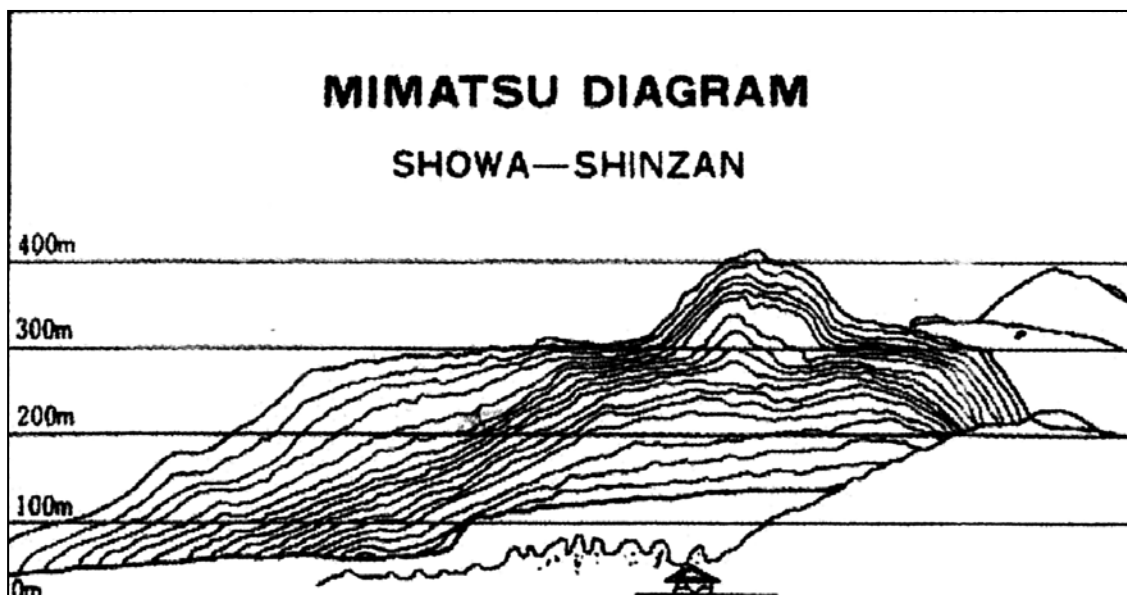
できないだろうが、恐れおののく住民を警察は監視し、生活や移動を嚴重に取り締まっていた。火山誕生の情報は札幌にもなかなか伝わらなかったという。

昭和18年(1943)、地震と轟音とともに地割れが生じ、畑が盛り上がっていく。毎日続く地震と降灰、地割れで農作物の収穫はできなくなった。混乱の中、壮瞥郵便局長の三松正夫は畑が盛り上がっていく様子を、考えられるだけの工夫をして観測し、記録していく。彼は、有珠山麓の明治新山(四十三山:よそみやま、明治43年生成)誕生を経験していたのだ。昭和新山の成長は2年後の昭和20年(1945)12月に終息した。

北海道の火山・湖沼研究の先駆者である火山学者秀三は、シンガポールから帰国すると調査・研究に入り、三松の観測・記録を指導援助し続けた。三松のまとめた火山成長経過の観測資料は秀三の努力によって昭和23年(1948)ノルウェーのオスロに送られ、国際火山学会で「ミマツダイヤグラム」と命名され、世界の火山学者から絶賛を受けた。この「ミマツダイヤグラム」は、日本だけでなく世界の各種教科書に紹介された。戦争直後の当時は、日本人の海外渡航は禁止されていたのだ。



【こんな田園に火山ができた】
(三松正夫のスケッチ、『火山一代記』より)



【ミマツダイヤグラム】

後年、三松正夫は述べている。

…寝食を共にする先生との交流から肌で感じた田中館秀三先生の人間像は「博学であって学者らしからぬ学者」「やさしい誰とでもすぐ親しくなれる気さくな人」それでいて「筋の通った、邪悪不正義を絶対許さぬ硬骨漢」だった。

なぜ昭和新山と名付けたのか。三松から依頼され秀三は、

火山の悠久なる寿命に比し、人間の寿命は余りにも短く、代を重ねると新火山誕生の歴史的 position 付けがあやふやになる。…昭和新山と名付ければ、いずれにせよ昭和天皇の御世の出来事と人々の印象に鮮明に残るだろう。

この項については『田中館秀三業績と追憶』を中心に、下記の書籍を参照されたい。

1. 三松正夫著『昭和新山物語』
2. 三松三朗著『火山一代』
3. 新田次郎著『昭和新山』
4. 日本シンガポール協会『SINGAPORE 4号』2003

⑨ 『田中館秀三業績と追憶』などから

- 「東大地質学教室卒業生に天才二人あり。曰く山崎直方、曰く田中館秀三…」
- 「先生は、先頭に立って突進する機関車のような方で、視野は広大かつ遠い将来に及ぶが、御始めになった事が十分に実るには多くの補佐役を必要とする…」
- 「田中館先生のようなスケールの大きい学者は、日本の大学では使いきれなかったであろう」
- 「孤独で報われることの少なかったように見えるが、稀有の英才を抱いてあの波乱の時代に思う存分の活躍を続けられたのであるからご本人としては本懐…研究者としてまことに羨ましいご生涯…」
- 「シンガポールの貴重な文化遺産を戦争から守った、破格の国際人」
- 「天馬、空を行くが如き男」
- 「日本は地理学の翻訳時代は過ぎた。日本的なものを樹立しなければならない」(留学を終わるころ)

5 おわりに

三人の田中館教授と題したが、日ごろあまり語られない二人の教授、寅士郎と秀三を中心に提起し、その業績を紹介した。三人それぞれが世界的業績を残していることに驚かれたことと思う。

寅士郎は昭和3年(1928)死去、50歳の若さだった。健康にあまり優れなかったといわれる同期の寺田寅彦が昭和10年(1935)57歳の没だから、寅士郎の方が健康に恵まれなかったといえようか。これは仮想であるが、もし健康だったなら愛知や寺田と同じように海外留

学生となり、また別の業績を残したのかもしれない。

なお、秀三は昭和26年(1951)66歳の没で、愛橘の亡くなる1年前のことだった。その日、秀三が最も愛した北海道の樽前山が小爆発を起こしたと伝わる。秀三の評価については実に多様な言葉が使われ、独特の強烈な個性を持ち合わせていたことがうかがわれる。だからこそ、“シンガポールの奇跡”を起こしたのだ。当時ではイギリスのタイムズ社でもありえないこととして、全く信用していなかった。

こうしてみると、一生を激務で過ごされた愛橘博士の長寿ぶりには、あらためて驚嘆せざるにられない。

この記事にふれたことを機会に、記事で紹介した書籍に当たっていただき、三人の田中館教授についての理解をさらに深められたら幸いである。

私の今から 77 年前の博士の思い出

田中館愛橘会 理事 富 田 喜平司

戦時中〔1943年?〕私が小学校4年の頃です。愛橘博士が福岡に疎開していた。

博士は神楽や剣舞が好きで小保内樺之助宅で文化人や子供や奥様方に囲まれ楽しい毎日の暮らしをしていたが、何故か私の父も毎晩のようにお邪魔をしていた。その集まり中に「乃木の奴」とか「東郷の奴」とか偉い方々を呼び捨てにする剣舞の指導者が居りました。

剣舞の仲間は同級生の小保内勤二君(前会長)・国分弘君・小保内哲夫君達と毎晩練習に励んだものです。そして、その発表会が公会堂で行われることが2年程続いていた。私の出し物は「孤軍奮闘囲みを破って帰る」と言う「城山」という激しい踊りの剣舞で、最後に立ったまま倒れるしぐさをする場面もありで拍手を頂いたことを覚えています。

私の剣舞が終わって観衆に礼をして舞台の袖に戻ったその時、博士が袖で一人待っていてくれて「おお～おお～」と大声で私の頭を撫でてくれたのをはっきり覚えていて、私はとても嬉しかったが博士の手が余りにもゴツクて硬くて、とてもとても痛かった思い出が、今でも鮮明に頭の皮膚に残っています。

田中館博士の生家と生い立ち

西 村 美代子（元二戸市史編さん嘱託員）

前書き

昭和35年3月、縁あって私は西村家の人となりました。私を迎えてくれた西村家の人々は、享保年中（およそ300年前）に建てられたという、萱ぶきの曲家で武家屋敷の造りで古色蒼然の趣の中でくらしていました。

夫と義母が言うには、「この家は田中館愛橘博士の生家で、博士はこの家で幼少期に育ったので現在も保存されているのです。」ということでした。

御給人の系譜によれば、『田中館家は享保年中、御給人に成下サル』、とあり、明治になり、博士の叔父が下斗米家を継ぐが、これまた、歴史に残る相馬大作の子孫となる。『下斗米家は元禄7年新田高願上福岡御与力に召出サル』とある。

田中館家といい、下斗米家といい、歴史に語り継がれる由緒ある名家だったのです。

後年、田中館博士が「私は武家の生れであって云々」が、よくわかりました。

このような環境の中で勉強したという部屋をみながら、博士の幼少時代を想像するに、大変都合がよかったのは、田中館与八郎氏の妻であり、下斗米家の直系であった、下斗米たよさんが残された『二戸聞書』の冊子でした。義母から渡された二戸の歴史書の中に、田中館博士が語られた生い立ちを紹介します。

1. 田中館愛橘博士の生い立ち 「二戸聞書」より

私（愛橘）は1856（安政3年）9月18日、東北の元の南部藩の侍の家に生まれました。父稲蔵は武芸を教える家系で18歳、母きせは16歳で神主の家系であり、当時の言い伝えでは、両親早婚の子供は壮健に育つと言われて厳しく育てられていたのです。

子供を丈夫に育てると言っても夏に強い夕立ちには、やっと歩き廻れる子供に菅笠をかぶせて尻からげさして雨の中を裸足でざぶざぶ暴れさせました。

その頃受けた教育は体育も知育も極めて不規則なものでした。私は5歳から家で手習を始め、6・7歳から武芸をやりました。これは平山行蔵（号子龍）の開いた実用流というので、当時の形式に流れた弊害を撓めようとしたもので、平山はこれを下斗米秀之進（後の大作）に伝え、大作は私の曾祖父の栄八（後の彦右衛門）に伝えたものでありましたから、私は自然平山式に仕込まれました。毎朝顔を洗うにどんな寒中でも水を使い湯は使いません。父や叔父が朝晩木太刀で百も二百も打ち出します。槍の突きもやります。それを見習って小さな木太刀でやったものでした。少し大きくなってから重い木太刀を持ってやりますと5－60位でひょろついて来ます。大人のやるのはいつまでもしっかりとシューシューと空気を切る風音がするのを聞いて、早くああやれるようになりたいと思いました。

9歳の時、正月稽古始めに実用流師範、下斗米軍七の門に入門し、又、欠端茂内に手習の弟子入りをしました。この先生は矢張り大作の直弟子でしたから、2・3の相弟子と共に庭先で裸足になって実用流の型を習い、それを練習しました。型は言葉通り型ですが、この先

生はそれだけではおかない。全くだしぬけに型にある打込をしかける。それに対し型にある受け方をやらずに倒されたりすると、「何のために稽古をする?。」と言ってたしなめられる。「どんな時でも百万の敵が目の前にいると思え。」と教えられました。

実用流はすべての武芸を含んだものでしたから、槍、長刀、柔術、それに鉄砲を打つ砲術まで緒口だけは皆習いました。鉄砲は殊に好きで自分で薬を作って十匁砲で的をうつ稽古を盛んにやりました。

遊びは鬼ごっこ、竹馬、風上げ等のほか、「こがえ」(ねつきともいう)、木の棒切れを尖^{とが}らしたのを地面に打込んで互に相手のを倒そうとするものや、「しのこ」という細長い篠^{しの}を乾かしたのを地面に突っかけて弾き飛ばして遠くへやるものなどもやりました。

尚、ここの所(二戸福岡)は山にも川にも恵まれておりますので、夏は川へ行って遊び、秋は山へ行って栗、あけび、葡萄^{ぶどう}などを取り、冬になって雪が降れば、雪こぎといって裾を高くまくりあげて裸足で雪の中をこぎ散らし、又草履の裏へ竹をつけて今でいうスケートをやりました。11、2歳の頃は馬に乗る稽古もしました。こんなことがまあ今でいう、体育でありました。

ついでに声の出し方ですが、唱歌などはそんな言葉さえ無い時代です。唯武芸の型を遣^{つか}う時の掛声は腹に力を入れて出す。書物はすべて音読でしたが、その抑揚緩急は意味に従って自然に出すように教わりました。これの進んだのが詩吟になる訳です。詩吟は「月落ち……」から正気の歌ぐらいやりました。和文では「この時正行肌^{かぐら}の守りを取りいだし……」などは勝手な節をつけて怒鳴^{どな}りました。他にこの里に特殊な神楽歌があるのをやりました。笛も吹いてみました。それから最も肺を強めたらうと思うのは、8歳から吹き鳴らした、胡桃貝^{くるみがい}というものです。これは夏になって木の皮がよく剥^はげる頃、胡桃^{くるみ}の木の皮を螺旋形に剥^{らせんけい}ぎ取ったのを円錐形に巻いてそれを吹いて遊ぶのです。なかなか大きな音が出ますが、それを長く続けるのが自慢で懸命にやったものでした。陣貝^{すいこ}の吸込み、吸切り^{すいき}など、なかなか味もあり力もいります。」

その外、昆虫採集、植物採集、地震への興味関心など、あらゆる自然界の中のいろいろな活動が愛橘少年の血となり肉となり、人間形成の基盤づくりができていったように思われます。世界的な大科学者の素地がうかがわれます。

とつとつ
唸々となつかしそうに語られる博士の思いが胸いっぱい広がります。

2. 田中館愛橘博士の育った家

その後、古い建造物の家屋は曲家^{まがりや}、武家造り、博士の生家ということで文化財としての保存の動きもあったのですが、現実のものにならず、昭和36(1961)年9月16日の台風により、萱葺^{かやぶき}屋根が損傷し、急遽母屋づくり、トタン屋根、平屋になったのでした。

時は流れ平成元年、西村トミの長男で

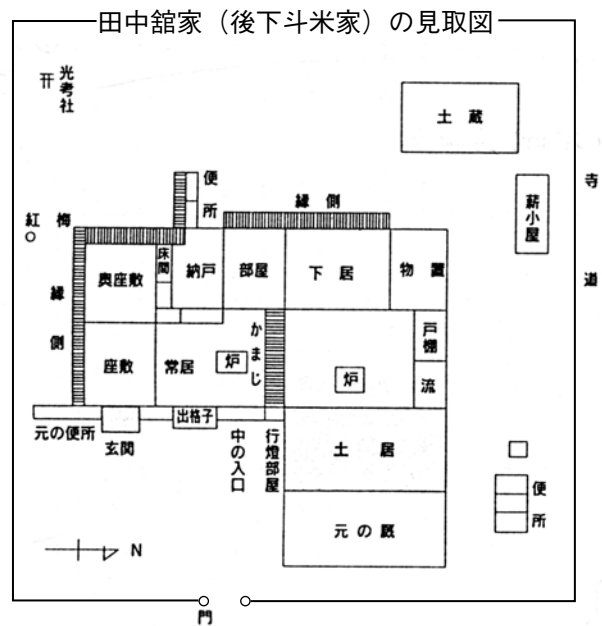


田中館愛橘の生家(当時)

あり、下斗米タヨ（与八郎妻）の曾孫^{ひまご}にあたる、西村久（私の夫）が住居新築、庭を整備し、現在に至る。田中館博士の生家は、博士の父稲蔵より、弟与八郎に分家、長男耕造（当時福岡町長）が跡を継ぎ、姪^{めい}の西村トミが引き継ぎ、その長男^{ひさし}、久が継ぐ血縁で保って来られたということになります。

平成の大修理で保たれた土蔵に印された、九曜紋（下斗米大作も使った紋と言われる）、盛岡城内から移った光考社（後の大作神社）の跡地の祠^{ほくら}ははるか遠祖^{えんそ}を想わせる。田中館彦右エ門^{やすまさ}、源廉政の石標（下斗米は平家、田中館は源氏、仲良く並んでいます。）等、寄り添って生きて来た、オンコ（一位）の古木（300年以上と言われるが……）、老梅に、昔々の武士の魂の面影を思わせられます。

くりかえしますが、博士が言う、「私は武家の生れでして……」、その心がわかるような気がします。



庭先にある二つの石標

- 神社の祠^{ほくら}（50cm×40cm×30cm）（光考社跡地）
昭和8年8月29日 福岡町 下斗米タヨ 建之
- きのこ型円筒（30cm×30cm 台座40cm）
田中館彦右エ門^{やすまさ} 源廉政

二戸地区内中学校生徒 田中館博士のお話を聞く会

昭和23年9月15日 田中館博士邸 中学校1・2年生

「世の中を広く見なさい 勉強をしっかりとやいなさい 今世の中はどう動いているか」
等々のお話に深い感動を受けました。

前列左から

○、○、○、○、田中館博士、
小野てつ子、阿部しのぶ、○、○、
米沢、橘弘子、佐藤

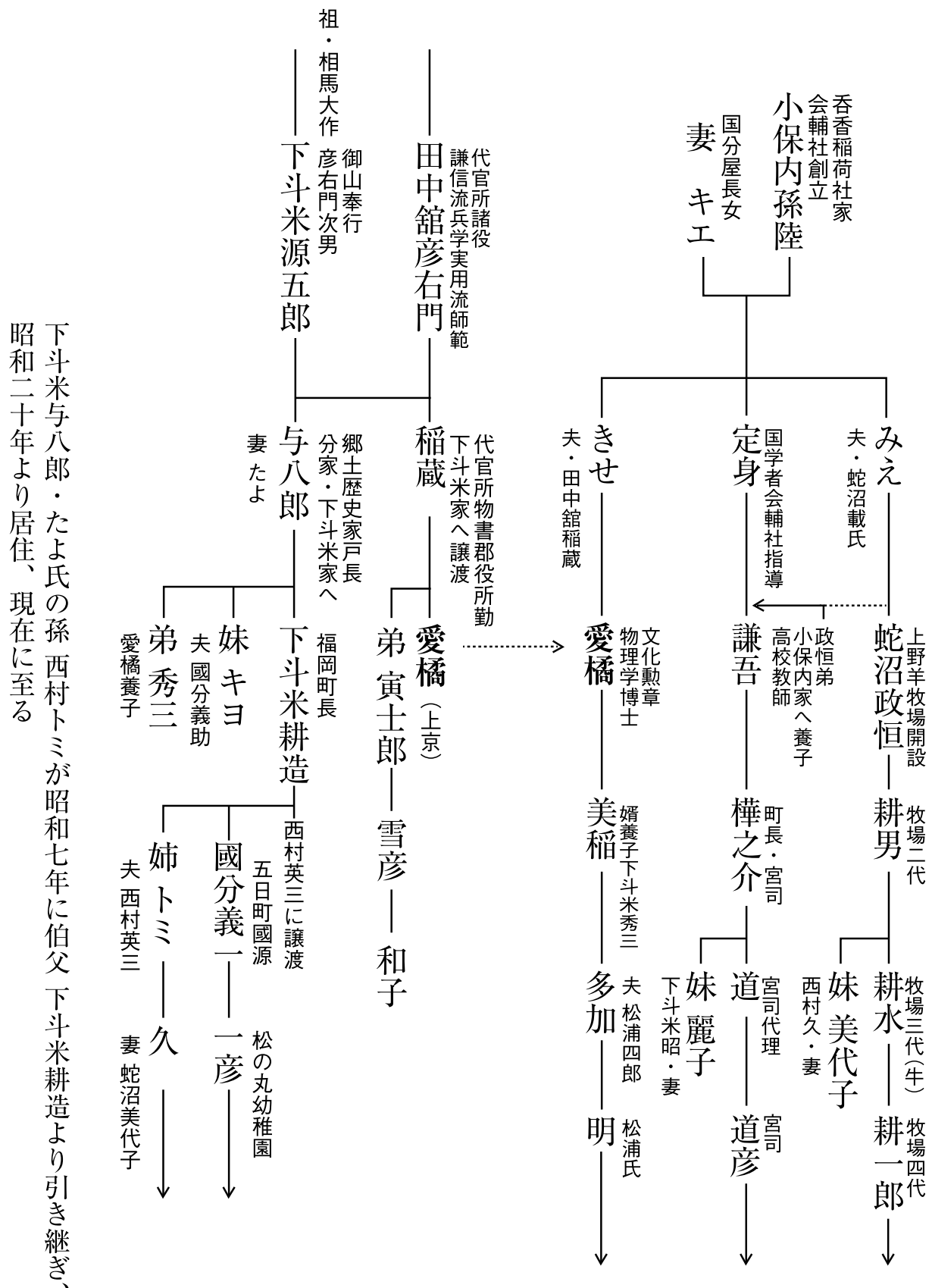
後列左から

小保内千代（小岩）、中島みえ
先生、○、木村毅先生、高橋弘、
土屋寛、中村先生、欠端良一、○、
小笠原米造、佐藤年子、佐藤瑞
恵、蛇沼美代子、上山司光先生、
今淵喜久子、下斗米先生、奥い
は、○、安ヶ平弘子、佐々木ひ
ろもと、○ （○印は不明者）



田中館愛橘博士の実家の変遷

【福岡代官所御給人の系譜より 略系譜】



文化勲章の「田中館博士のお話を聞く会」記念写真

昭和26年(1951)9月19日
於：田中館博士邸(小学校6年生)



指導主事 南館省一郎	社教主事 若松 忍	米沢小 菅原禎悦先生	堀野小 吉田和男先生	福岡小 藤原栄一先生	石切所小 柴田宏先生		
小保内くら	奥アツ子 (福小)	逸見美代子 (堀小)	仁左平小 小野愛子先生	小野佐智子 (仁小)	田村秀子 (堀小)	浪岡	浪岡昭三
畑本 (米沢)	高村和男 (米小)	荒谷悦子 (石小)	関美代子 (仁小)	菅原孝平	平 琴子 (米小)	藤本トモ子 (米小)	
平朔郎	滝沢	田中館博士					

編集後記

今号は本年度総会で講演を予定していました菅原孝平氏(本会副会長)の「3人の田中館教授」について特集しました。字数制限された中で記載できなかった部分についてお話をする機会がありましたら説明しますと言われております。

郷土の偉人、田中館一族の業績に今一度スポットを当て改めて素晴らしい人材を輩出した二戸市に誇りを持ちたいと思います。

富田喜平司氏、西村美代子氏より寄稿してもらいました。